

仁和寺蔵「伝聞抄」および「大疏要勘抄」の紙背文書

歴史研究室

仁和寺の塔中蔵聖教第137函の聖教には、紙背文書のあるものが数点あるが、そのうちの「伝聞抄」および「大疏要勘抄」の紙背文書のいくつかを紹介する。

「伝聞抄」(塔中蔵第137函30号3)は、巻上中下の3冊からなり、3冊とも縦25cm、横16.5cmほどの袋綴装となっている。紙数は表紙共で巻上37紙、巻中34紙、巻下28紙あり、そのすべてに紙背文書がある。表紙に「伝聞抄巻上 印玄」(巻上)とあり、また奥書からみてわかるように、「伝聞抄」は法印印玄が「伝流抄」諸尊法を授けられた受法記で、その時期は応長元年(1311)8月から翌年4月におよんでいる。印玄は仁和寺尊寿院の住持で、「伝流抄」の撰者ともいわれる真光院禪助から付法をうけたことがしられるが(「仁和寺諸院家記」)、その受法記にあたるものかもしれない。紙背文書には、(2)のごとく寺主御房の他界を訪う内容の書状が数多くあるが、切断等の欠損や錯簡のため、差出・充所や、本紙・礼紙の接続などは判然としない。熊野詣とみえる(1)もそれに関わるものであろう。印玄は「少輔」といわれ「寺主承禪息」であるが、書状の充所がもし印玄充ならば、ここにみられる応長元年と思われる8月上旬に没した寺主は承禪にあたろうか。その他、年紀の明確なものとして、応長元年9月29日の諷誦文(3, 4, 6, 7)と、荘名未詳の荘園内での殺生禁断に関する書状(5)をあげた。

なお3冊本とは別に同体裁で、正和元年(1312)9月・嘉暦元年(1326)5月分を記した「伝聞抄」1冊(30号4)があるが、その奥書に「伝聞抄三卷附録也 印玄法印御自筆 心蓮院」とあり、3冊本とともに印玄自筆本で、時期は降るが、内容的には巻中と下の間に入っているものである。

「大疏要勘抄」は巻第八上下の2巻(同函66号)および巻次未詳2巻(67号)の4巻あり、巻子本で、巻第八下のみ完存で、他は欠損がある。奥書によれば、嘉暦2年、性然の筆にかかるもので、江戸末の包紙の表書には「東寺法輪院之本歟」とある。紙数は巻第八上下でそれぞれ17, 18紙、巻次未詳の断簡で8, 12紙あり、切紙も多く含まれるが、これまた表紙をのぞきほぼ紙背文書がみられる。紙背文書には、「大疏要勘抄」を书写した性然の書状(2など)のほか、賀嶋荘関係文書(1, 3, 4, 8~10)や、大僧正以下僧名歴名(5~7)・出仕交名などがある。賀嶋荘は、摂津国西成郡にあった荘園で、当初は仁和寺青蓮寺領であったが、西園寺公経のとき、彼の所領となっている。鎌倉後期の、この時期に大乘講捧物役については仁和寺に納めていたものであろうか。また延慶3年(1310)と年紀にみえるもの(7)をはじめとする、大僧正以下の僧綱を書きあげた一連のものは、筆跡のちがいにより数群に分類できるが、或る寺院にかかわる僧綱補任抄のごときものと思われ、掲載したもの以外なお数紙にわたる。出仕交名は掲載しなかったが、包紙に「東寺西院月次日次等出仕録歟」とみえるものにあたる。年末詳5月分につき、日次に出仕の僧名を掲げ、そのなかに性然の名もみえる。

(綾村 宏)

沙汰□そも彼も正□問答已後、□所へも可申子細之□にて候き、委細事性然法印可申上候、以此旨可令申給候、恐々謹言、

十一月十日

□□

(4) 嚴道書狀 (折紙)

(同 第12紙)

〔折紙端裏書〕
〔北中二五十三〕

〔敢力〕

〔美力〕

日向九郎能直代□道申賀嶋御庄□録宮神主職事、前御代番訴陳候之刻、以當御領被進此御方候之間、欲令言上子細候之處、如御庄家披露者、被召置闕所候云々、先以驚入候、若如之御沙汰候之条、不便次第候、以此旨可有御披露候哉、恐惶謹言、

正中二年五月十二日

〔敢力〕
□道狀

(5) 僧綱歷名

(同 第14紙)

大僧正 定助

僧正 經助

權大僧都 覺久

覺賀

顯潤

昭弁

□命

嚴昌

嚴念

權少僧都 祐玄

觀高

信勝 去年広義門御座御祈、前大□道昭金剛□□□□、

顯瑜

良慶

公深

成秀

慈慶

印朗

清嚴

胤管 房替大僧都辭退替

覺賀

□宝 源助 雲助大僧正辭退替
實宣 増仁

(6) 僧綱歷名

(同 第15紙)

大僧正 雲助 広義門院御座御祈 降三世法實

權大僧都 隆淳

円雅

朝基

有賀

(7) 僧綱歷名

(第八卷下 第4紙)

法印 弁朗

実寿

法眼 宗守

暹紹

法橋 濟賢

延慶三年二月廿一日

〔去〕
□□
〔助力〕
□□

(8) 某書狀

(卷次未詳) 第7紙

賀嶋庄役大乘講捧□事、申入真光院御房、頼禪返狀如此、□可為□様候乎、諸寺役庁役□付新司有沙汰遣候て、□是様□不可申、尙□被及候上、□々皆無沙汰間、□□申候、賜御返□可申入候、恐々謹言、

(9) 某書狀 (卷次未詳) 第9紙

〔前欠〕

損亡拂地之時、被免寺役庁□等之条、先傍例候歟、然而随分□□□□、以今年々貢可沙汰入候由、下知候了、其次第先日則申入□處、□可被付所務於寺家候□、□申候□□□存候、無相違□様、御伺可申沙汰給候、恐々□

七月卅日

□□

(10) 某書狀

(同 第12紙)

年始御吉事最前申籠候早、猶以不可有尽期之御事候乎、抑賀嶋吉書御使事可有御計候歟、檢断以下□条々、無心本相存候、且窮冬□定使上洛之後結解未尽候、

〔伝聞抄〕奥書

(卷上) 印玄法印 隠道後号文妙上人御伝受記也

心蓮院

(卷中)

心蓮院

(卷下) 伝流抄 印玄法印御受法記也

心蓮院

〔大疏要勘抄〕奥書

(第八卷下)

嘉暦二年六月廿九日書之

性然

(卷次未詳)

嘉暦二年五月十八日書之

性然

〔伝聞抄〕紙背文書〔抄〕

三宝衆僧御布施一裹

応長元年九月廿九日

(1) 頼禪書狀

(卷上 第12紙)

熊野詣酒肴事申入候之處、御禁忌之上者、不可及
其沙汰候由、御氣色候也、又猶々此御事歎入候、
毎事於今者期御上落^之時候、恐々謹言、

八月廿八日

頼^禪

(2) 沙弥縁了書狀

(同 第33・34紙)

寺主御房御他界事承候、返々歎存候、年来大小事
申承候之處、加様に候へハ、一身の歎存候、御心
中密申候、未入見參候に如此令申候之条恐存候、
何事なく候とも、故寺主御房の御時に、

(中欠)

謹言、

九月十二日

沙弥縁了〔花押〕

謹上 少輔律師御房

(3) 源某諷誦文

(卷下 第1紙)

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施一裹

右諷誦所請如件、敬白、

応長元年九月廿九日 源^某

(4) 某諷誦文

(同 第2紙)

敬白

請諷誦事

右為過去幽靈出離生死往^レ、諷誦所請如件、敬
白、

応長元年九月廿九日

□□

(5) 某書狀

(同 第11紙)

申候、恩可有御披露候也、

当庄殺生禁斷事、八日自円満寺聖来申候、制禁事
被仰付長保寺候了、□□尤可存禁制之方便、就^{其力}可
入不等於網曳場之由相触置、□致其沙汰云々、可
為何様候乎、随御□□可存知仕之由、可令申入給
候、

(6) 比丘尼某諷誦文

(同 第27紙)

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施一裹

右諷誦所請如件、敬白、

応長元年九月廿九日 比丘尼如[□]

(7) 某諷誦文

(同 第28紙)

敬白

請諷誦事

三宝衆僧御布施

夫以宿一樹之景、曠劫因□□流襲劫縁、何況夫婦
併僂□□、爰聖靈早世当士之忘、依□□鳴鳧聲、
早出六道昏衢□□剩往詣、乃至法界平等濟□□所
請如件、敬白、

〔大疏要勘抄〕紙背文書〔抄〕

(1) 某奉書

(第八卷上 第3紙)

賀嶋庄役大乗^講□捧物事、学頭僧正狀副具書如此、何
様候□、恩可被致沙汰之由被仰□候也、恐々謹言、

十二月八日

(性然力)

卿法印御房

(2) 性然書狀

(同 第5紙)

一荷進上候、可令入見參給候、毎事參上之時可申
入候之由、可有御披露候、性然恐惶敬白、

十二月十八日

性然

□□御^房

(端裏ウツ書)

(性然力)

(3) 某書狀

(同 第11紙)

(前欠)

定申旨候歟、其以後□候て□、御返事をハ可申□
候、御許□候き、落居無恩候、可申案□候也、内
々沙汰候しハ、□□掌為当庄下司納取、無何其足
□失候哉、又他所雜掌にて無得□次目ハ已後、所
務^二も可懸候に、是□無其儀為職人無故所納取公
務^一、何不出候哉、其上又彼御捧物□□以後、当
院家被充行候、所務□□こそ無力候へ、所務以□
役尤不□事候哉、其上又拂地今年作法□□以水□之